

平成 29 年度京都府看護師等確保対策推進協議会 協議概要

- 1 開催日時 平成 29 年 1 月 8 日 (水) 午前 10 時～12 時
- 2 開催場所 京都ガーデンパレス「祇園」
(京都市上京区烏丸通下長者町上ル龍前町 605 番地)
- 3 出席委員 11 名
〔城守委員、石丸委員、三木委員、今西委員、安井委員、藤原委員、
芦原委員、武田委員、加藤委員、萩本委員、小松委員〕
欠席：中村委員
- 4 協議概要

報告事項

- (1) 前回の概要と追加資料について
- (2) 看護師等確保対策に係る実態調査の結果概要 (中間) について

協議事項

- 京都府保健医療計画の中間 (案) について

< 報告事項 (1) についての主な意見 >

- ・意見等なし

< 報告事項 (2) についての主な意見 >

- ・今後の一番の課題は在宅であり、在宅の要となる訪問看護ステーションについては、もっと真剣に考えていく必要がある。
- ・訪問看護ステーションの看護師を増やすことは大変なので、病院が「訪問看護」を提供していくことも必要。
- ・事業所の中には、訪問件数は多いが中身が伴っていないケースもある。また、そのような事業所のスタッフは、モチベーションが維持できずに仕事が続かない。
- ・看護師が常勤換算で 2.5～3.0 人の事業所では、24 時間サポートは難しい。
- ・訪問エリアについては、事業所の指定を受ける際に決まるが、訪問エリア内であっても小児の経験がないため断っているというケースはあると思う。
- ・病院の看護師が訪問看護ステーションでの勤務を希望して異動することあるが、1～2 年で病院に戻りたいと言う人が多い。スタッフが多い病院は、産育休等の休みを取りやすいが、スタッフが少ない訪問看護ステーションでは、体調不良で休むことも難しい。
- ・在宅で 24 時間体制は、それを支える看護師の配置が可能なのか、配置された看護師が業務を続けていくことができるのかといった懸念があり、本当にできるのだろうかと思う。
- ・訪問看護ステーションを立ち上げた人は、使命感を持ってされているので事業が続くが、その次の世代が続くかどうかという懸念もある。
- ・地域事情もあるため、全体として在宅を推し進めることは厳しいと思う。
- ・在宅は診療所と訪問看護ステーションの仕事と認識していたが、私病協では、夜間については病院の当直医がフォローするなど、地域の診療所と連携して在宅を支えていこうとしている。

- ・病院の医師、看護師が、地域の診療所や訪問看護ステーションといかに連携すべきかを考えており、今ある医療資源をいかに有効利用するかを考えている。
- ・看護師として病院へ就職した後に、訪問看護ステーションへ転職することは選択肢の一つ。
- ・学校では、就職先の選択肢がたくさんあることを伝えているが、新卒で訪問看護ステーション等へ行くことは厳しいと思っている。
- ・新卒で訪問看護ステーションに就職する方は年々増えており、全国では50名程度いる。
- ・病院と連携し研修をすることも必要であり、地域で訪問看護師を育てていくことが必要。
- ・そのためには、行政や病院等の関係機関の協力が必要である。

<協議事項についての主な意見>

- ・現状課題について、地域別に見た場合には介護老人福祉施設においても看護師等を増やす必要があることを追記してほしい。
- ・対策の方向性について、量の確保と質の確保があると思うが、対策をわけて記載した方がわかりやすいと思う。
- ・在宅へ移行するためには、訪問看護ステーション数やそれに伴う看護師・介護職員の数を増やす必要があるが、実際には厳しいものである。
- ・対策の方向性について、「専任教員の支援」とあるが、専任教員は養成所の先生を指すイメージが強いが、大学と養成所のどちらとも支援する方策を希望する。
- ・成果指標について、府内就業率80%に大学生が含まれているとなると（府外出身者の）大学生の多くは府外に出て行くことになるので、この成果指標でよいのかと思う。
- ・学生が大学に流れているため、養成校への応募は減ってきている。大学は、卒業後に府外へ出て行く学生が多いため、大学を含むと目標達成は厳しいのではないかと思う。
- ・学生の地元就職率は高いが、実習先での体験は学生に大きな影響を与えるため、実習先で良い体験をすると、その病院へ就職することも多い。
- ・（看護学校における地域枠の設定は）公立学校では聞いたことあるが、私立学校では、地域への還元よりも学生確保を重視しているところもあるというのが現状。
- ・「新人期、中堅期、管理期と体系的にキャリア形成を図り「生涯現役」を目指した研修体系の整備を推進します。」とあるが、これは京都府がするのか。
- ・訪問看護ステーションは、経験がある看護師を育てるという環境はできつつあるが、新人を育てようと思えばお金がかかる（訪問看護ステーションは、報酬が出来高払いであるが、新人は少なくとも半年は一人で訪問に行くことができないので、事業所の負担が大きい）ため、そこへの経済的な支援が必要ではないかと思う。
- ・訪問看護ステーションは、ほぼボランティアの形で看護学生の実習を受け入れてもらっているが、実習の受け入れのために訪問件数を減らしているような状況もあるため、経済的支援（行政的な支援）が必要ではないかと思う。
- ・医療現場では、看護補助者が一番不足している。看護補助者は、看護師の仕事を支える重要な人物であるが、多くの現場で不足しているため看護師がみなしの看護補助者として入っている。看護師は、本来の看護師の仕事をするべきであり、看護補助者の不足が徐々に影響してくるのではないかと思う。